

孫づる伸びだしたら追肥

——永田 茂穂

鹿児島で最初に栽培されたことから、薩摩隼人にちなんで「隼人瓜」と命名されました。

原産地はメキシコなどの熱帯アメリカで、熱帯地方では多年生、温帯地方では宿根性あるいは一年生のウリ科つる性草本です。種子は極めてまれな一果一種子です。茎葉は強健で、つるは10m以上に伸びます。高温を好み、短日条件で開花・結実するため、初霜の遅い地域が栽培に適しています。本県では自家用の栽培が広くみられます。

果実には、白色種と緑色種の2種類があります。緑色種は白色種よりも大型で、収量は多いがやや青臭さがあります。

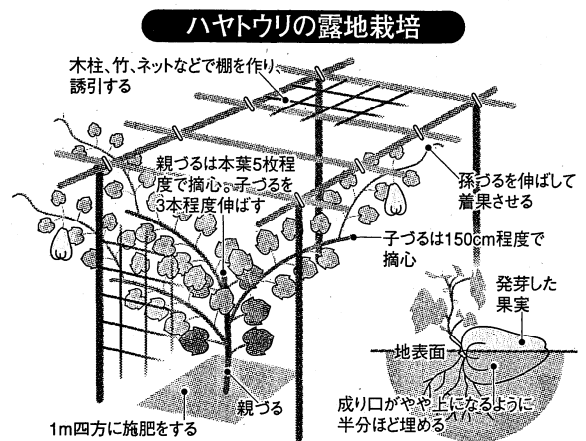
果肉はち密で繊維が少なく、風味は淡泊です。漬物としての利用が多いですが、若採りして酢の物やサラダ、煮物などにも利用されます。

繁殖方法は実生や根株利用が一般的です。ここでは、実生による露地栽培を紹介します。

生育適温は20度以上で寒さに弱いです。排水の良いほ場を準備し、1株当たり株元の1平方mに堆肥5kg、苦土石灰100g、化学肥料100g（三要素15%の場合）程度を施し、耕うんします。植え付け時期は晩霜のなくなる4月中旬～5月上旬です。栽植様式は畝幅4m、株間4m程度です。発芽して10cm程度に伸びた果実を横にし、成り口がやや上になるように半分ほど埋めます。なお、貯蔵中の果実は春先の気温上昇により発芽します。発芽が始まった果実は涼しい所に置いて芽が伸びすぎないようにします。

果実は孫づるによく着きます。親づるは本葉5枚程度で摘心し、子づるを3本程度伸ばします。子づるも150cm程度で摘心し、孫づるを子づるのあたり4本程度伸ばします。余分な子・孫づるなどは早めに除去します。栽培期間が長いので孫づるが伸びだしたところに追肥をします。株当たり窒素とカリの入った肥料を500g（成分16%）程度畑全面に施用します。つるは、木柱や竹、ネット等を利用した棚などに誘引します。

収穫は10月上旬ごろからです。生食用は開花後15～20日、漬物用は30～35日、種子用は40日以上を目安に収穫します。貯蔵は発芽しないように10～12度程度の場所で行います。低温には弱いので貯蔵箱にモミガラを入れるなど対策が必要です。



（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部長）

平成21年7月9日（木）／南日本新聞